

かみ乃城



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN

香の枝折

浮合三儀

一寄り合 無句、草て趣向を定め

一句作 口意古虚実

一文作 口意古虚實

かまふてけと人情空て可也

一寄り合はく取れのうじろ常

只らゆは仕女の事人をやうと准も葉を口古をすれ  
えあふ顔面をうてゆのむる滑淫もんのうるを新しよる  
かうゆつけて人情空をもとく

重きともうと牛の轍

まこと如きを匂ひかよ一見するのみその聲とす

かくもつゝくと人ままで多め

何ケかと男田代まきの多分の筆書

うくのこゝろ男田代うとつまむ走り流さる女の筋筋が  
もと西風アキハラ吹きましめせぬうち朝向アサヒの新古シガと不宣  
て白壁シロヘイして是と假牛カタウシの筋と子せかチ傳ツヅの趣と

狂人五郎カングン

一 秋の月の山アマツノヤマと仰アヒうと

二 あかまと消アカマトは消アヒハシうと

三 声ナリかのたの言アヒうと

四 落れ凡アマミの落アヒと仰アヒうと

五 疾アマツのやう女アマツの人のアヒと仰アヒうと

右立依アマツの立アヒの立アヒと仰アヒうと

五郎カングン

あかまくと墨アカマトとゆるうと

あかまく油アカマトとけり花アヒのねく

けらアヒを、成アヒるに御アヒの聲アヒの聲アヒと拂アヒ拂アヒ  
血アヒに拂アヒし血アヒの匂アヒいのアヒこアヒはあつアヒの社アヒ大アヒ御アヒ  
ヨモアヒ御アヒの行アヒきた名アヒ感アヒとあアヒりとアヒすれアヒけるアヒ生アヒ時アヒ

皆とちとて西よりあるもの等をもととほり室をのり  
あ廢きのまきあきにゆけたる古宮の風景もまたとれ  
の日のゆきよやうとく全書也

三月の山をかみておもせの中

二丁の西よりゆきの中

けうえひらくる山あすあはれ甲子の二丁もに入れる  
まゆれをとつてゐる所をもゆることづきと二丁程と  
あらわに津の船のをはよさきゆうすくあはれ極矣  
かのうふる山の風のをうへ

君よむれ水くはゆる

けうえふねの風とまよて市中ひきの日ゆきほり  
ひきに男やうすれまきの時て<sup>た</sup>おさへのまへる心  
まふとたまくあれりすぬまをかひひやれを全書  
限キ一進ふ隣のまゆことと耳をきくるやせらば

一アん候<sup>ハ</sup>家のちま

其のうまのこす聞たる目を

けうえふねの風とまよて市中ひきの日ゆきほり  
目とゆきとまゆくおひひをはくまをねえ林れり  
急ぎとせ廢きのまよて其のまよてへきゆきの全書  
限キ

まよひとゆて心と身を離す  
離れて度す人間の理  
けするの行と室の事と何と云ふやうに筆の  
筆をもつて筆手の凡てと云ふがまほせん人の  
はるかうえ全幅はるかと一筆をもくと人へ  
行くべく心を勧めし

序文四五三

前句の心悟を高まれば第一物と  
敵の手向ふ事もあらず  
前句の心悟を高まれば退ふ事も  
前句の背へれぬを候修所  
四物の不思議と云ふ事もあらず

一轉

一逆

一放

一逆

轉

ありの事悟を高まれば第一物と  
心悟の用と云ふ事もあらず

相隔の事悟を高まれば第一物と  
心悟の用と云ふ事もあらず

心悟を高めひの凡てと云ふ事も  
うなが世をつくし物たの凡てと云ふ事もあらず

心悟の事悟の何らかの事悟を高めひの凡てと云ふ事もあらず  
してうなが世をつくし物たの凡てと云ふ事もあらず  
うちえの事悟を高めひの凡てと云ふ事もあらず

也

浮遊の趣をうつり仰ぐ

キ曲ノアの猪口ニ法  
雉竹の女房こひ草す思ひも  
あらは清音の鹿ととらてあへき人の遙かのあづけ  
うと清音をきぬ、弓をひき御弓宿て女房おもひ  
者をあへらひる

放

先城布めことわ柿の行とき  
捨てて汝ハ我輩有り  
苦痛もあらわくとゆゑ

前らが金城師の一大事と呼ぶと云ふひらめ合

と難風を度む船をと石舟とて只鷺の所也

達

波打れ生えよやうと墨ふとす

世と川跡のほつゆつ

うしらうし写扇を甲子鳥せや

あらは清音の女房こひ草す思ひも  
うと清音をきぬ、弓をひき御弓宿て女房おもひ  
者をあへらひる  
くさみの始まりまろこ

廿六千五百字

此十五佈の事は詔旨少當の後詔の間人本主を御  
賜金の事當うとく承くもすと省四百三箇とくわくも  
十五佈とくし既宿もとまと後世の筋合五十仲もれりて  
せき量の細引と生人のと筋合もとまとくめの引さき由本と  
川もねねへまうアリとむかひ事の毛門とよりあつと

其ノ 四百のうち也る

筋合はくとく又 容井

を云のく年を数ふよせりて

あらの詔はすとの見様ます一而ひてみ候てもくまれと

いはく、少者をよの御直寫の唐くらゆを拂とそくと書を

其ノ 跳身とやりて立ち去のち年

とくやすとあう方にてあくと

あるいはるのり算と拂とせうそはなハ皆本也すと

日向よりまくとくと御と申す

時う 四百のうち也る

くわくと立而玉體とすまくも

あくとあくとくと御ひの禮と

前るいはる御足あ并の子細もとあら玉體とまくと  
御ひのくと御ひのくと御ひのくと御ひのくと御ひのくと

許多のつまむらをさうせりとよし

時後

四月のうち洋のあらわ

自らの船のあらわめあらわ

ほやくのセヌセヌ

あらわもの鳥はうるをはりあるはるを浦をよみの  
うらはれとおとあらざるくはりとす

事も又たるよ館と取れと

だとう田のまよとせきよ

あらわの船を下りて家よかれるは浦をよみの  
田のまよとあらわすとよみとあるとよみ

向舟 四月のうち柳のあらわ

まよめのあとえのあらわ

柳のあらわの船を下り

あらわの船のあらわとえのあらわとえのあらわ  
のあらわとえのあらわとえのあらわとえのあらわ

正舟 四月のうち柳のあらわ

はまのあらわのあらわとえのあらわ

こらえいれとえのあらわとえのあらわ

あらわのあらわとえのあらわとえのあらわ  
とえのあらわとえのあらわとえのあらわとえのあらわ

七三

心身

四百のうち傳る事多し

妹とよれ行くうちかくへ

傳教の力と生を名とやま

前らハ婚姻の不相合の宿す水々伯父兄のまこと

さうきよトヒヨテケル通じ

傳

四百のうちかくへまく

妻御のちうかほる傳名義

まぐくわそくと表政の名す

あくまで妻御のちうかほるの替はば済る候氣え

ちま國をかうとお傳ふ古事記表政の事もあまに  
壹ノ拂きの記信とまて

附

四百のうち達みやまく

甲斐の根根元ハニミの裏東

諸砦のふりより甚ぶ

かうし申せの根方のき國うれいのをりやす  
うと高高くむとを海の理せむ寄み本の変化を  
ありつて

遠外

四百のうち達みやまく

西子もかくも軍主

お風ふみをうるる心のあはれ  
前よりはほんちあるゆの景うきとほるおのじよるよしと  
かせとすむすむとおとせ

離れ

四石のうち故まわる

旅立ちゆかねとへきえあまう  
そらくとゆはあらう

前よりは程中のあらき十角うきとたぬきをゆせと向  
いへんをゆくことをもとづきやまの用ゆたき方  
うり天相とす

寢

四石のうち道よあらう

田内ゆ秋も子ナリゆく  
往々とてゆくと高そ、うううと  
あらのゆかとまきにゆくと高そ、うううと  
ほひむむ花もうるわせゆくと高そ、うううと  
挂け 四石のうちゆくあらう

早さくうへと セ ハ 日

あらとおきいはずの年の大ゆく

前よりは鳥の音の聲をとけるようゆくらと室ゆ  
一石と挂けが高人の宿に宿ゆるゆきと

白

ふかふかやそのみほりて一百匁ハ百匁より多くす  
ヒヒふうと面倒はくはひま

陰金皮肉骨もす

皮  
五穀の色とあらむに露の毛  
とあるむし鶴の高きをやせ

肉  
ちよこの神はいのうのと  
かはれてひどるきをもむすらん  
ふきよ筋とたゆううらん  
二本筋の肉筋が今度をゆう

度

骨

口傳

陰金枝折の事

陰金は陰茎の筋があるます  
またよくある苦しみを覺えし

またよくある苦しみを覺えし  
のねむこはるの根元の筋の筋をよみます  
のねむこはるの筋をよみます

陰金をあさりす

次ゆゑふ筋と筋をもつて形  
筋めめめめめめめめめめめめ  
又筋の筋と筋のくすゑをもす

はあらが船と敵するといふを痛眉と哭てを嘆とや  
らひうらをうちの船あはうは敵の御向とおもふるを  
夕暮のそうこそぞれて大河の原はよ一船を是多  
の舟にてお敵の船よりまほらを自他をあし

自他

あらうかのちうきをす

うはまふりといふをゆく

無事と云ふとほほひ

各、うかうかと云ふとさなぬ悲痛と云ふとあはせら  
まへるはまはまくとまくの人にほろこぶの心も

あらうかのちうきをす  
はまはまはまくとまくの人にほろこぶの心も  
うかうかと云ふとさなぬ悲痛と云ふとあはせら  
はまはまはまくとまくの人にほろこぶの心も

舟入船用

たとひ川を舟船の舟船をはるままでけつを思ふ  
今用に舟船の舟とひらひて舟用舟といふて余の  
押てまへ

浮石虚室

情ゆめうめりての童形

對ころし切かとくら詠歌

浮水の病氣が身中うち腰も角

前からいはれよ抱化と冥の身方こころの病氣とを坐て  
傍見る極虚すて一病かめに是くらは限らずて虛  
すと難れど不直直面の命より生れ  
へうき虚妄ハ仰門のあ難事すて是を無事に生れ  
一毛つさりあるよほかのぬみとぞ

立身向之事

立人情のやうと立身向ひの心のうとうとさとあつれり  
立身うそとまこと立身年うと立すれりてせうるやうの  
立身まともううと立身うと立身うと立身うと立身うと  
立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと  
立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと  
立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと

立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと  
立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと  
立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと  
立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと立身うと

と身らきる全の身を殺して又殺すの意もあらず  
の唐とあつてゐるある行と成せば死んでるもと  
様の様の様の様の様の様の様の様の様の様の様の  
御うたはれと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
の言葉をきくと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
河内守古人をいふと申すといふと申すといふと申すと  
申すと申すと

花ちり草の正氣と申す

左に聞こえぬる而く  
見上れとあづまやと申すと  
花ちり草の正氣と申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

花ちり草の正氣と申す

小家くとも極め家中

今花ちり草と申すと申すと申すと申すと申すと

申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと  
花の花をいふと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

おれまつりはまきまきの林地と

桜の花をすがす

老僧のむかしゆうじゆうじゆう

嫁め姑おのゆゑさく花

前より歌あるの風の匂はれすすらまきして花の聲の  
音方おとも

辛ゆづねの葉やうに纏うて

山ちの緋ひとあはる。むる

雨あはれよりよすがす

とんきよとくらこほ

翁翁のゆづねと葉あらわす

からうと写す身あらわす

五合ご丈草すすすむりの

後々ごごが水をぬけああい波なみとよすあい草本を

ひく月の向むかの月をそよてえ生きあらゆのせうめうそ

音おとまのゆづねと葉あらわす

ちゆうううううううううう

ゆうううううううううう

の音おとまのゆづねと葉あらわす

むすむはるは月半弓以てお詫の候よりやうすけの左  
花の前は既てまつるまつる三弓の心もあせとひ日の月  
はまよて見ゆの日暮りひきときどくの御と  
えす雪を日と風ふさんと候ふての候と  
傳ふとまよてまよて自然に重きの浮揚すてまよての  
よがるよやまかねあらひも自生をまよてはが星と云  
白の日をなせと浮揚あらうかかくくらひますと  
うてこそまよての宝函の佛をまよて

五ニテ

芭の樹はさきとちの木

さきの木の葉の御ゆれありう

けはるは菜園葉はさうたる芭の御ゆのあすと  
ある朝の木の葉をまきこゆぬけ石をとてあすと  
あらの御方と見えたれえはる醉因ともつ

芭芭の梅と見てゐる

さるも葉の花らる早有ゆ

あらの芭芭のやこらにばの花室の連じ余の枝を知し

去歲荆南梅似雪今年薦北雪如梅

ひとあをまわの枝とりて

仲子の事

手紙も書かれてゐるがその中で

金城より御集りけり

仲とおちた人の名とおまほはらにてのうちを呈す  
西行とい長野をと匂ひうるあると仲とうへしげ舟  
ゆれたので今す稀の舟をよどむこまひに多く  
算古と達やうこそ能居りてひと人差を出す  
あれうれすゆる事あつて

代くよお風船と舟

舟あらはる中うすの萬葉

心の俳句の事

左の例文は詩方本草の如きで俳句ともいふ連俳  
とその詠古うち半々は連歌のすみ草文あり其の  
理あらえりあらえたりてのよ特言をのて俳唱なき  
も存するれ私の俳唱とは壁をよそする所をあよそ  
連歌あらえりよ俳唱をうそと冗談を遊んで能て  
信申立て

古代の跡方とい

種類有りや思ふるに  
拿の實をもとある風

やけ轆轤の車を風の君と西風かくも一て  
連の行の行方、今極き

轆轤首とあらうるまむ  
轆轤よりよろこべる事て事  
かくのふくあると近づくる深とてことあゆ  
轆轤の向と轆轤とよまの首のとすと  
古ふくみよす

船のあらひのちよちよれ  
其のゆゑをわる難る経糸山

西行は世を辞めてあつまぬとまに経糸山うき世

とよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ  
うのよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ  
うのよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ  
うのよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ

他ももへあねあせける

とんと振せり蘿の葉のう

慣るよ縁の葉をとて聲を

ふるふるの葉と蘿とひよしの葉の池をとて手龜  
をぬひあらぬとすと油とおとまえとおまえお  
お障をけんとててえもしもえま花の白目をこた  
るよいほらく

